‘iter menstruum’ か ‘intermenstruum’ か？（Amm. 20, 3, 2）

[1]山 沢 孝 至

2 quod alias non euenit ita perspicue, nisi cum post inaequales cursus iter menstruum lunae ad idem reuocatur initium certis temporum interuallis, id est, cum in domicilio eiusdem signi tota repperitur luna sub sole liniamentis obiecta rectissimis, atque in his paulisper consistit minutis, quae geometrica ratio partium partem appellat. (Amm. 20, 3, 2)[1]

2 このことがかほど明瞭に生起するのは，（太陽と月との）足並みの揃わぬ運行のあと，月のひと月の行路が一定の時間間隔を経て初めと同じ所に回帰するときを措いてない，すなわち，同じ星宮の中で月の全体が，太陽の下に一直線に蔽いかぶさっているのが認められて，かつ，しばらくの間，幾何学が部分の部分と呼ぶ一角（角度 60 分の 1 度＝分）に留まっているときである。

アンミアーヌス・マルケッリーヌスが紀元 360 年 8 月に起こった日蝕の報告を契機として，日蝕の起こるそもそもの原因を説明したくだりの，その冒頭部分であるが，ここにはテクスト上の問題が存在する。１行めの iter menstruum がそれで，これは Valesius（＝17 世紀フランスの古典学者 Henri Valois）による修正であり，写本はすべて intermenstruum の１語を伝えるのである。ただし，９世紀に成立の最有力写本 V と１５世紀の写本 E では inter menstruum と２語にしていると，諸本の校訂注にあるけれども，少なくとも V 写本については，ヴァティカン図書館提供のカラー画像を見る限り（68r 下から２行め）[2]，inter men ftruum のように書かれていて，途中２ヶ所の僅かな空きが同程度であるので，これも intermenstruum と１語に解してよかろう。こちらの読みを採った場合は，「（暦の）月と月との間（あわい）」，すなわち「新月の時期（朔）」を意味するので[3]，文章中次の属格 lunae と一緒になって，「月の朔」といういささか冗語気味の表現になる。しかし，こちらが lectio difficilior であって，しかも何より，諸写本一致の読みであるところから，

[1] アンミアーヌス本文の引用は Seyfarth (1978) による（以下，同様）。
[2] https://digi.vatlib.it/view/MSS_Vat.lat.1873
[3] ‘The period between two lunar months, the time of the new moon’ (*OLD*). アンミアーヌスは *OLD* が取り扱う時代の枠外にあるが，語義の変化を想定する必要は基本的になかろう。但し，次ページに述べるように，語義が問題となる用例がある。

常道に従ってこれを採用する研究者も少なくなく，iter menstruum への改訂案を採る校訂者との間で，意見が真っ二つに割れているのが現状である。というか，従来は Valesius の改訂案を受け容れるのが大勢であったところへ，写本通りの読みを採る立場が近年勢いを増しているように見受けられる[4]。果たしてどちらが妥当であろうか。

話をさらにややこしくするのが，アンミアーヌスによる intermenstruum の，他の唯一の用例である。少しあとのほう，今度は月蝕についての記述の中で，何とも不可解な文章が出て来る。traditurque doctrina multiplici congruente non nisi tempore intermenstrui deficere uisam usquam lunam.（Amm. 20, 3, 11）（そして，幾通りもの教説の一致の上で言われていることには，月が蝕を起こすのがどこかで見られるのは朔の時を措いてない。）というのであるが，もちろん，朔と関連するのは日蝕のほうであって，月蝕なら plenilunii とするか，intermenstruum に plenilunium の意を認めねばならぬ[5]。Valesius が，先述の写本の読み intermenstruum の修正に踏み切ったのも，この箇所との整合性に苦慮したからであったが[6]，そればかりではない，日蝕のそもそもの描写にも奇妙な用語法が見られる。primo attenuatum in lunae corniculantis effigiem, deinde in speciem auctum semenstrem posteaque in integrum restitutum.（Amm. 20, 3, 1）（最初，三日月の形に細く見え，次いで半月の姿に増し，その後欠けたるところなしに戻った。）「半月の」と訳した（そう訳すしかない。現実にはあり得なくとも！）元の語 semenstrem は，「暦の月の半分の，月半ばの」の意であるから，本来は満月を云う筈である[7]。つまり，アンミアーヌスの用いる -menstruus, -menstris 系の語はどれも問題含みであって，「暦の月の半分」を「天体の月の半分」と解し，「朔（新月）」を「満月」と解さなければ意味が通らない。まことに困ったものだが，この２つの誤謬に共通した認識の誤りを析出することは困難であり[8]，なおかつ，アンミアーヌスにはこれ以外の用例が見当たらないため，さらなる追究は断念せざるを得ない。intermenstruum は，通常の語義で理解するしかなく，実際，こちらを採用する校訂者もそうしている[9]。

intermenstruum lunae の lunae は，属格でなく与格であるとも解せる。その場合，「月にとって，朔が一定の時間間隔を経て初めと同じ所に回帰するとき」と訳すことになろう

---

[4] 管見の限りでは，以下の４書が写本の読みを採っている：Ernesti (1773), Boeft-Hengst-Teitler (1987), Fontaine (1996), Viansino (2007).

[5] 例えば，Rolfe (1940) は，‘at the time of her mid-course’ と訳し，満月と解している。

[6] Valesius と Ernesti (1773) は後段の intermenstruum を plenilunium の意に解する。

[7] アープレイユスに本来の使い方が見られる。semenstris luna flammeos spirabat ignes. (Apul., *Met*. 11, 4).

[8] 20, 3, 11 の派手な誤りについて言えば，この記述はキケロー『国家論』1, 25 の日蝕に関する記述を下敷きにしているふしがあるので，そこからのメモを間違って月蝕のところに当てはめた可能性がある。

[9] Ernesti (1773) は，訳も注も添えていないが，巻末の Glossarium latinitatis において，ここの語義が後段と同じとは考えられないと評している。

が，これで意味の改善が図れるのかどうか，心許ない。いや，そもそも，「朔が初めと同じ所に回帰する」とはどういう意味なのか。これを考える必要がありそうだ。写本の読みに従う立場からはいかなる解釈ないし翻訳がなされているのだろうか。

Budé 版の Fontaine（1996）は，「不揃いな運行のあと，一定の時間をおいて，新月が出発時と同じ位置に戻って来るとき」と訳し，「不揃いな運行」に注して，「月の満ち欠けよりもむしろ，太陽と月のとる相互に不揃いな運行を云う」と説明している[10]。この注はあまり要領を得ないが，つまりは，太陽と月が天球上の軌道も運行速度も互いに異にすると言いたいのであろう。しかし，「新月が出発時と同じ位置に戻って来る」とは具体的にいかなることなのか，何の説明もない。羅伊対訳で，訳文に注も割り込ませる込み入った体裁の Viansino（2007）では，「新月［の位置］が（［太陽の運行ペースとは］別な運行ペースをとったのち）一定の時間をおいて，太陽があるのと同じ位置に戻って来るとき」と訳し[11]，原文の initium を回避して，「初めと同じ位置」を「太陽があるのと同じ位置」にすり替えている。それなら，「新月が新月の位置に戻って来る」という同義反復ではないかと言いたくなるが，恐らくそうではなく，ここの「同じ位置」とは，「ぴったり重なる位置」のことであろう。博引旁証の詳注を誇る Boeft-Hengst-Teitler（1987）が「月と太陽との合（conjunction）が再び同じ場所に回帰するとき」と言い換えられるとしているのも，同じ趣旨だと思われる。月の白道面は太陽の黄道面に対して僅かに傾いているため，太陽と月が合となるたびに日蝕が起こるわけではない。白道と黄道の交点またはその付近に限られる。従って，アンミアーヌスの言う initium とはこの交点のことだという理解である。交点を出た太陽と月が時間の経過とともに――いや，主語は intermenstruum lunae であるから，交点を出た「朔（新月）」が，再び交点に戻る。どうもイメージしづらいが，加えて，交点は昇交点と降交点の２つが天球上で相対峙しているのだから，スタート地点に戻ると言えるのかどうか。

iter menstruum の読みを採る場合は[12]，こうしたことに悩まされずにすみそうだ。月がひと月のサイクルで満ち欠けをし，朔から始まって朔に戻る。明快そのものである。しかし，残念ながら事はそう単純ではない。後段との折り合いが悪いのだ。id est で繋がる後段に述べられているのは月が太陽を蔽い隠す現象であるから，全体を素直に読めば，朔イコール日蝕の条件が整う時，と言っているに等しいことになる。これはどうにもま

---

[10] ‘quand, après une course inégale, la nouvelle lune se trouve ramenée au même point de départ, à un intervalle de temps déterminé.’ および，注 24, ‘Plutôt que du cours croissant et décroissant de la lune, il s’agit plus exactement de la «course inégale» des divers astres, les uns par rapport aux autres.’

[11] ‘quando [la posizione] della luna nuova (dopo ritmi di movimento diversi [da quelli del sole]) viene richiamata nella medesima posizione [in cui si trova il sole] a intervalli temporali stabiliti.’

[12] 管見の限り，以下の諸本が該当する：Wagner (1808), Eyssenhardt (1871), Gardhausen (1874), Clark (1910), Rolfe (1940), Selem (1965), Seyfarth (1968), Szidat (1977), Seyfarth (1978).

ずい。従って，こちらの立場でも，辻褄合わせに initium を交点と解する例が見られるのだが[13]，文脈からしてこれは無理筋と言ってよかろう。では，やはり intermenstruum に分があるのか。

しかしながら，いずれに軍配を上げるべきかを判断するためには，実は，本文の先を読まねばならない。なぜなら，アンミアーヌスにしては珍しいことに，ここでは日蝕を起こす原理，しかも同じひとつの原理が，３とおりの言い方で念入りに重複説明されており，説明の推移を見ておく必要があるからである。冒頭に引いた箇所にすぐ続く第２の説明はこうなっている。

3 ac licet utriusque sideris conuersiones et motus, ut scrutatores causarum intellegibilium aduerterant, in unum eundemque finem lunari cursu impleto perenni distinctione conueniunt, tamen sol non semper his diebus obducitur, sed cum luna e regione uelut libramento quodam igneo orbi et aspectui nostro opponitur media. (Amm. 20, 3, 3)

3 なおかつ，たとえどちらの星の周回運動も，納得のゆく原因を穿鑿する者たちが観察したとおり，同じひとつの終着点に，月の運行が完遂されたのち，定常の隔たり[14]をもって合流するとしても，それでも太陽はその日につねに蔽い隠されるわけではなく，月があたかも錘を垂らした如く真っ直ぐに日輪と我々の視線の中間に入って邪魔をする場合にそうなるのだ。

そして，全体を締め括る第３の説明。

4 ad summam tum sol occultatur splendore suppresso, cum ipse et lunaris globus, astrorum omnium infimus, parili comitatu obtinentes circulos proprios saluaque ratione altitudinis interiectae iunctim locati, ut scienter et decore Ptolemaeus exponit, ad dimensiones uenerint, quos ἀναβιβάζοντας et καταβιβάζοντας ἐκλειπτικοὺς συνδέσμους, coagmenta uidelicet defectiua, Graeco dictitamus sermone. et si contigua isdem iuncturis praestrinxerint spatia, dilutior erit defectus. 5 si uero articulis ipsis inhaeserint, qui coactius ascensus uinciunt et descensus, offunditur densioribus tenebris caelum, ut crassato aere ne proxima quidem et apposita cernere queamus. (Amm. 20, 3, 4-5)

4 要するに，太陽が隠されて輝きを抑えるのは，それ自体と，あらゆる星の中で最も

[13] Rolfe (1940), Szidat (1977).
[14] Boeft-Hengst-Teitler (1987) に従って，distinctio を「隔たり」と解しておく。

低い位置にある月球とが等しく連れ立って固有の円周を保ちつつ，間を隔てる高さの割合を損ねずに合わさる位置にあって，プトレマイオスが蘊蓄を傾けてものの見事に説明しているとおり，アナビバゾーン（及び，カタビバゾーン）・エクレイプティコス・シュンデスモス（黄道昇交点及び黄道降交点）と――すなわち，蝕をもたらす交点のことだが――我々がギリシア語で呼びならわしている点に達したときなのである。そして問題の結節点に隣接する空間をかすめる場合は，軽めの蝕となる。5 しかし上昇と下降を羽交いに結んでいる節そのものに張りついた場合には，いっそう濃い闇で天が蔽われ，ために濃密な空気のせいですぐ隣に並んでいるものすら認めることができないのだ。

この第３の説明は，ギリシア天文学の用語を用いた専門的な解説であって，ἀναβιβάζων ἐκλειπτικὸς σύνδεσμος（黄道昇交点）/ καταβιβάζων ἐκλειπτικὸς σύνδεσμος（黄道降交点）とは，月の通り道である白道が太陽の通り道である黄道と天球上で交わる２点を言い，月が南から北へ横切る箇所が ἀναβιβάζων（「昇」），北から南へ横切る箇所が καταβιβάζων（「降」）として区別される。この２箇所以外では，たとえ朔であっても月は太陽を蔽い隠す位置にないため，日蝕は起こらない。アンミアーヌスは，プトレマイオスの理論として紹介しているが，これは記述に「箔をつける」ための方便であって，あの難解な天文学書を自身で読み解いたろう筈はなく，典拠は，詳細は不明ながら，別の書であろうとされる[15]。一方，アンミアーヌスは最後のところで皆既日蝕と部分日蝕の区別にも初めて言及しているようである。

ここまで通読して分かるのは，アンミアーヌスの３段階の論が概ね（あくまでも概ねであるが）易から難へ，素人向けの解説から専門的内容へと，情報を付け足しつつ順に排列されているらしいことである。第３の説明ほど端的ではないが，それでも第１の説明から第２の説明に移ると，月と太陽との周回運動の兼ね合いが重要であること，月と太陽が「定常の隔たり」すなわち，軌道の違いによる「高度差」を有していることが新たに加わり，そして何より，朔であってもつねに日蝕が起こるわけではなく，太陽と地球の間に月が割り込む場合に限られることが明言される。この最後の要素は，第１の説明で iter menstruum の読みを採った場合，不十分もしくは不正確にしか述べられていなかったところであり，より正確な説明への修正を図ったものと理解できる。逆に，intermenstruum と読むと，朔の位置が白道上を移動してゆくという高度な話を最初にいきなり持ち出すことになるが，それなら，「納得のゆく原因を穿鑿する者たちが観察したとおり」なる挿入句は第１の説明にも（あるいは，にこそ）相応しいのではないか。ま

[15] Szidat (1977) 113-114, 120-121 を参照。

た,「月があたかも錘を垂らした如く真っ直ぐに日輪と我々の視線の中間に入って邪魔をする場合」とは，第１の説明の「月の全体が，太陽の下に一直線に蔽いかぶさっているのが認められ」の言い換えであることからすれば，ひと月単位の月の満ち欠けという最も基本的な観測事実をいう「月の運行が完遂されたのち」に対応する文言も第１の説明にあったほうがよく，iter menstruum lunae がそれに当たる，とも考えられるであろう。

以上に検分したアンミアーヌスによる日蝕の説明の推移は，iter menstruum の読みを採る場合，大略次のようになるだろう。①日蝕は，月が出発点（朔）に戻った時にしか起こらない。すなわち，月が太陽を蔽い隠す位置に暫く留まる時である。②朔の時に必ず日蝕が起こるわけではなく，太陽より低いところを周回する月が，太陽と地球との間に割り込む時に限られる。③日蝕は，太陽と月がともに昇交点または降交点に達した時に起こり，交点の近辺では軽めの蝕，交点そのものにおいては黒闇の蝕となる。

これに対し，intermenstruum を採用するなら，上の①をこう置き換えることになる。①日蝕は，朔が出発点（交点）に戻った時にしか起こらない。すなわち，月が太陽を蔽い隠す位置に暫く留まる時である。

さて，いずれを可とすべきか。後者は，③で説かれる交点の概念を，明快とは言いかねる表現で①にいきなり持ち出したために，いささか取りつきにくい説明になっている。これを懸念し，平易を旨として語り直したのが②なのであろうと解釈できる。そして，③で改めて専門的な知識が披露される。一方，前者は，先述のとおり，①に不正確な記述が含まれるのを②で修正するとともに，概ね段階を追って詳しさを増し，③の専門的記述に至るという自然な流れが見て取れる。しかも，月蝕についての論述の冒頭にもこれと似通ったパターンが確認されることは，ここで注目されてよい。

> Nunc ueniamus ad lunam. apertum et euidentem ita demum sustinet luna defectum, cum pleno lumine rotundata solique contraria ab eius orbe centum octoginta partibus, id est signo septimo, disparatur. et quamquam hoc per omne plenilunium semper eueniat, non semper deficit tamen. (Amm. 20, 3, 7)

> 今度は月に移ろう。紛れもなく眼にもさやかな蝕を月が被るのは，満々たる光をもって丸くなり，太陽に向かい合って，その円盤から 180 度，すなわち７つめの星宮に隔たっている時に限られる。そしてこのことはどの満月の時にもつねに生じるのではあるが，かといってつねに蝕が起こるわけではない。

最初に月蝕の起こる条件を「これ以外にない（demum）」と限定呈示するのだが，実はその条件が満たされただけでは蝕は起こらないので、追加説明が必要になる。このパターンは，日蝕の記述では「この時を措いてない（non … nisi cum …）」という文言を用い，

①から②にかけて見られるけれども，intermenstruum の読みを採った場合には，初めから正確な知識を伝授する体裁になる。これ 1 例だけでは心許ないが，それでも，アンミアーヌスの叙述の癖としては，いきなり正解を告げない iter menstruum に分がありそうだとは言えるであろう。

Szidat (1977) 117 は，①と②を実質的に同一内容の繰り返しであると見なし，この無駄な重複はアンミアーヌスが複数の典拠を用いているさまを反映していると推測する。それも一理あるが，むしろアンミアーヌスの天文知識はどうやら一知半解らしく，整合性のある記述をつねに期待するのは無いものねだりであると自覚した方がよさそうだ[16]。そして，整合性にこだわらないのであれば，iter menstruum の修正読みを採り，論の流れを自然なものにした方が歴史叙述の中の余談に相応しいのではないか。

参考文献

Boeft, J. den, D. den Hengst and H.C.Teitler. 1987. *Philological and Historical Commentary on Ammianus Marcellinus XX*. Groningen.

Clark, C.U. (ed.) 1910. *Ammiani Marcellini Rerum gestarum libri qui supersunt, vol. I*. Berlin.

Ernesti, A.W. (ed.) 1773. *Ammiani Marcellini rerum gestarum libri qui supersunt*. Leipzig.

Eyssenhardt, F. (ed.) 1871. *Ammiani Marcellini Rerum gestarum libri qui supersunt*. Berlin.

Fontaine, J. (ed. & tr.) 1996. *Ammien Marcellin: Histoires, tome III, livres XX-XXII*. Paris.

Gardhausen, V. (ed.) 1874. *Ammiani Marcellini Rerum gestarum libri qui supersunt, vol. I*. Leipzig.

Rolfe, J.C. (ed. & tr.) 1940. *Ammianus Marcellinus, vol. II*, London & Cambridge, Ma.

Selem, A. (ed. & tr.) 1965. La storie di Ammiano Marcellino. Torino.

Seyfarth, W. (ed. & tr.) 1968. *Ammianus Marcellinus: Römische Geschichte, Zweiter Teil*. Berlin.

Seyfarth, W. (ed.) 1978. *Ammiani Marcellini Rerum gestarum libri qui supersunt*. Stuttgart & Leipzig.

Szidat, J. 1977. *Historischer Kommentar zu Ammianus Marcellinus Buch XX-XXI*. Wiesbaden.

Viansino, G. (ed. & tr.) 2007. *Ammiano Marcellino: Storie, vol. I*. Milano.

[16] 少しあとの方（20, 3, 7-8）に今度は月蝕の説明があり，これに続く月の満ち欠けの論の冒頭（20, 3, 9），月は同じ星宮，同じ黄経で太陽と出会うたびに暗くなる，すでに述べたとおり（ut dictum est），との記述がある。このことから，アンミアーヌスにはそもそも朔と月蝕の区別がついているのかどうか疑わしい，と Fontaine (1996) の注にあり，Boeft-Hengst-Teitler (1987) もその可能性を考えるが，そこまでアンミアーヌスを貶めるのもどうかと思う。但し，伝存のテクストにはこれ以前に朔を論じた箇所は見当たらないから，いずれにしても ut dictum est は奇妙である。

Wagner, J.A. (ed.) 1808. *Ammiani Marcellini quae supersunt, 3 vols*. Leipzig.
https://digi.vatlib.it/view/MSS_Vat.lat.1873